

Title	TA (Teaching Assistant) の声 サイバーメディア フォーラム no.10 情報教育システム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2009, 10, p. 45-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70286
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

TA の経験を通じて

許 寧霄 (大阪大学 言語文化研究科)

本年4月からTAをやらせて頂いています。TAとして十分な役割を果たしているか疑問を持ちながらやってきましたが、早いものでそろそろ一学期が終わろうとしています。短い期間でしたが、多くのことを経験したり、習得したりすることができましたので、ご報告いたします。

学生たちの信念

TAを募集するメールを初めて見た時、言語文化研究科の留学生である私が応募できるか疑問を持ちました。「応募してみて、だめならば仕方がない」といった気持ちで応募したのですが、希望通り英語の授業のTAとして採用されました。

採用されたことを知ったときには大変嬉しく思いましたが、同時に、心配もありました。それは私が中国人であることです。学部生の皆さんは陽気で、生き生きしている若者です。さらに、阪大生の誇りを持っているので、欧米人ではない外国人のTAに皆さんが協力してくれるか、心配だったのです。そこで、最初の2週間ぐらいは授業に出てもなるべく黙って、学生たちと話をしないように様子を見ていました。

しかし時間が経つに連れて、学生たちはTAがどこの国の人であるかなどということは全く気にせず、勉強に熱心に取り組んでいることがわかってきました。そして、アジア系のTAである私を軽蔑することもなく、優しく接してくれました。そのおかげで私もだんだん緊張がほぐれてリラックスしてやれるようになりました。これは阪大生の資質であるかどうかはわかりませんが、色メガネで人を判断しないことに感動いたしました。そして中国人が英語のTAをすることに抵抗とコンプレックスを感じていた自分を勇気付けてくれました。

沈黙な学生たち

私の持っていた阪大生のイメージは、向上心旺盛で、熱心で、授業のときには積極的に発言したり、ディスカッションすること想像していました。ところが実際

には、「もう一度、説明が必要な人がいる？」と先生に聞かれても、ほとんどの学生が黙っていました。ところが、学生の中には先生の話を理解できずに、何したら良いのか分からず、そのまま座っている学生が結構いました。

また、授業では毎回、1つのグループがプレゼンテーションをします。このときに質問をすれば、期末の成績に考慮すると先生がおっしゃっても、90%以上の学生は黙っていて質問をしませんでした。

私が思うには、やはりこれはアジア系の学生の特徴で、恥ずかしさのいか、謙虚なのか、誤ることを恐れるのか、学生はなるべく発言しないで黙っています。しかし、このような状態では先生は授業の目的を達成できないし、その授業の中身にも悪影響を及ぼすはずで

す。そこで私は、質問をするチャンスがあるたびに積極的に手を上げて質問をしたり、あるグループがプレゼンテーションをしていて、何か反応が必要な場合にも手を上げて反応しました。学生が質問したくてもできない、という重苦しい雰囲気を払拭したかったのです。すると、学生たちも私に付いてきてくれて、それまでは質問や発言をしたくても恥ずかしくてできなかった人が、手を上げてくれるようになり、クラスの雰囲気が活発になりました。また、わからない時も、恥じることなく正直に「わかりません、もう一度説明をお願いします」と多くの学生が言えるようになりました。

今では、学生たちが何か困ったことがあると、私に相談して解決方法を求めるようになり、授業の良い雰囲気作りにも貢献できたと思います。授業の内容もそれまで以上に面白くなったように思います。

TAの経験から将来へ

そもそも、私が英語の授業のTAに応募した理由は自分の英語力を高めるためでした。しかし、実際にTAという任務を通して大切なことに気づきました。それは教員としての魅力や教育方法についてです。たとえば、英語のスピーキングの授業において、グループワ

ークの魅力を実感しました。授業の半分以上の時間を学生のグループワークに充てます。そのグループワークの目標はストーリーを作ること。一つの話題について質問を設定し、コミュニケーションのギャップを埋めさせることプレゼンテーションをさせることなど多様ですが、このグループワークの活動を通じて、私は以下のことを発見しました。①三人組のグループの中には必ず英語が得意な人がいます。グループワークという相互行為の実践に参加することによって、そのグループワークの目標を達成する過程において、優秀な学生とともに他の2人の学生も知識を習得できると思います。②グループでストーリー設定の際に相談したりしているときに、先生は各グループを回り、指導します。この時の指導は *scaffolding* の役割に立っており、学生にはより印象深くなると思います。

以上は、今学期に私がTAとして活動した感想です。私が実際に経験したことは想像以上のことで、大変有意義な時間を過ごせたと思います。

国際英語と CALL 授業

三木 望 (大阪大学 言語文化研究科)

1 はじめに

私は今年の 4 月から日野信行先生のティーチング・アシスタント (以下、TA) をしている。きっかけは、昨年のサイバー・メディアセンターで行われたシンポジウムで先生の実践報告をきいて興味を持ち、先生にお願いして授業を聴講して、今年から先生の TA になった。日野先生は、「国際英語 (international English)」の重要性を強調して、授業でもご自身の理念を実践なさっている。授業の詳しい手順は、先生ご自身や他の TA によって同誌で既に紹介されているので、本稿では、私の授業中のメモから具体的に各国のニュースとその「国際英語」が CALL 教室でどのように取り上げられているのか、授業や学生の様子を交えながら報告してまとめる。

2 国際英語と世界の報道

日本人学習者の中には、アメリカ英語に慣れていて、アメリカ英語を標準とみなしている人が多いのではないだろうか。しかし、実際には、特に英語を第 2 公用語とする ESL の国々の英語と教室で聞きなれている英語の間には、特に発音の点で違いがある。移民が歴史的に多く、「人種のるつぼ」と称されるアメリカや、近年移民が急増しているイギリスでも、現地の英語には多様性がある。これらの英語圏に世界各国から来る移民や留学生が話す英語は様々なのである。

日野先生は、この現実には真正面から向き合って、学生がいわゆる「標準的な英語」ではない強い訛りのある英語に偏見を持つことなく、英語を一つの道具として捉えて世界の人々と接することができるように、授業で果敢に挑んでいる。

国際英語を学ぶということは、同時に国際事情を学ぶことでもある。例えば、フィリピンのニュース番組では、ニュースキャスターがフィリピン英語を話しているが、インタビューに応じる地元の人々は、

地元のフィリピンの方言で話している。同じニュース番組で異なる二つの言語が混在しているのにも関わらず、どちらの言語にも字幕はつかない。これは、フィリピンで英語が公用語で、視聴者が地元の言語及び英語を理解できるからである。香港のニュースキャスターがイギリス英語訛りなのは、イギリス植民地の名残である。

語彙の使用でも多様性が見られる。インフルエンザが世界的に流行したとき CNN や他の報道機関が 'H1N1' を使用し始めても、香港のニュースでは 'swine flu' を一貫して使用していた。

報道の仕方も報道機関や国のイデオロギーの違いによって様々である。CNN のウェブサイトでは掲載されていない、米兵が犬をけしかけるイラク兵の写真を報道する Al Jazeera や、選挙を正当化しようとするイラン政府に気遣いながら 'alleged election fraud' でジャーナリストの意地を見せる Tehran Times など、メディア・スタディ的な要素も加味される。こうした授業の中で、学生は同じ出来事でも報道が一樣ではなく多面的であることを学び、国際感覚を身につけていく。国際英語を学ぶということは、言語だけでなく、国際事情、歴史、思想も学ぶことなのである。

3 CALL 教室の使用

こうした国際英語の授業を支えているのが、CALL 教室の設備と日野先生の日々の努力である。特に、授業で discourse marker の用法を生映像で指摘したことは非常に効果的だったと思う。アメリカの報道官の記者会見で、記者が質問をしようとしたとき、"Let me finish." と言って、自分が重要なことを述べようとしていることを強い姿勢で示すために使用されていた。授業では、その様子を画像でも、つまり、報道官の表情でも確認できた。

インターネットに接続されている CALL 教室の使

用の利点は、刻々と更新される最新のニュース報道記事が読めることである。日野先生は、臨機応変に予定の記事から、同じトピックの最新の記事に変更する。この授業の特徴の一つである衛星放送の視聴は、CALL 設備というよりも、衛星放送を早朝からビデオ録画している先生の努力によるところが大きい。

4 実際の英語授業

授業の使用言語は英語である。学生が日本語で答えると "Try it in English." と言って、あくまでも英語のやり取りを求める。時折日本語の解説が挿入されても、質問は英語で、最初 Wh-疑問文から始めて、選択疑問文 ("Is he positive or negative about this?") あるいは Yes-No 疑問文へと徐々に学生が答えやすいように質問を変えていく。または、同じことを語レベルあるいは文レベルで平易な英語に言い換える ("How do you feel about animal cloning? What do you think of the cloning of dogs or animal cloning? What is your attitude toward dog cloning?")。海外の英語ニュースは、言葉そのものだけでなく、思想、宗教、紛争が関連して複雑なため、先生は背景知識についても補足説明や（例、中東やアジアの国の場合ほぼ必ずその国の宗教は何か確認する）、身近に感じるように日本との比較をする（例、香港の H1N1 の学校閉鎖と阪大の全学休校を比較して学生に感想をきく）。

5 従来の授業と比較して

日野先生の授業は、衛星放送の視聴もあるが、本来はリーディングの授業であって、リスニングが主ではない。限られた時間の中で話されるニュース英語は、非常に速く、私自身、授業のニュースを聞きながらメモをとっているが、映像をみている余裕が全くないほど速い。我々が（プロの速記を除いて）日本語ニュースレポーターの言葉を正確に一語一句書き取ることが困難のように、生のニュース英語は dictation や note-taking に適しているとは言い難く、この授業の目的ではない。視聴だけでは学生のほとんどは理解していないかもしれない。そこで日

野先生は、衛星放送を視聴後、必ずインターネットで同じトピックの英語新聞記事を取り上げる、あるいは英字幕付きの NHK の BS 放送も織り交ぜる。衛星放送視聴後、先生の質問に対して答えられなかった学生も、英語新聞記事の単語を使って答えるようになる。

こうしてみると、日野先生の方法は従来の普通教室の授業で、教員が学生にリーディングのトピックに興味を持たせ、授業にアクセントを与えるために、関連ビデオをみせて、最新の新聞記事のコピーを配布していたことを CALL 教室で実践していることがわかる。すなわち特別なコンピュータ技術がなくても、CALL 教室と先生の日々の準備で従来の方法を効率よく進めることができるのである。

6 今後

これまで述べてきたように、国際英語とは何かを体感できる授業であるが、残念なことに、TA の目に映る学生の応答や授業態度は、やや積極性を欠く。その一方で、ニュースに興味がありそうだが、英語でどのように表現したらいいのかわからない表情をしている学生や、おとなしい性格のため自発的に発言しないのではないかと感じる学生がいる。それは、多様な国際英語は体系的に捉えにくく、日本人学習者に馴染みのあるアメリカ英語よりもはるかに難しいからではないだろうか。

日野先生と話し合ったところ、授業の向上のために、阪大の WebOCM (Web ブラウザを利用した授業支援ツール) の利用を検討中と伺った。WebOCM では、「新世界」という掲示板で学生が質問をして講師とコミュニケーションを行うことや、講師が小テストを行い、管理することが可能だ。阪大には、WebOCM 以外にも、授業別に学生が既に登録されている WebCT で、同様の機能が利用可能である。こうした Web 授業支援ツールを利用した、国際英語の CALL 授業に今後も期待している。